

## Essay

### 生きることと死ぬること

浜松労災病院・医学慰霊祭，院長講話からの抜粋

浜松労災病院 院長 戸部 隆吉



人は死んだ後どうなるのでしょうか。誰にも分かりません。

仏教の中陰和讃では、三尊阿弥陀の教えとして、死者は冥土に赴くと49日間、あてのない暗闇をさまよひ、残された者の供えた灯明と水を頼りにしながら7つの関所をこえ、35日目に三途の川を渡り、49日目に自分が生きている間に作った煩惱も消滅し、阿弥陀如来に導かれて、家を離れて極楽へ往生すると教えています。

その間、残された者は、徒らに嘆き悲しむことをせず、灯明と香を絶やさずに追善供養して死者の菩提を弔い、極楽往生を祈ることを教えております。その後、1周忌、3周忌、7周忌と故人を追悼する仏事が行われます。

我が国で平安時代の頃、阿弥陀如来への信仰から生まれた思想でありましょう。

仏教よりも早く、日本に根付いていた神道では、あの世の世界、死の世界、よみの世界に対する観念は鮮明でありまして、50日間毎日死者を祭り、50日祭に納骨し、5年、10年のくぎりて死者を偲びます。

キリスト教では、復活後、50日間弟子と共に過ごし、50日目に昇天されたイエス・キリストを偲び50日目に納骨されると云います。

私は、以前、旅行をしたオーストリア・チロール地方の村で教会の庭に、未だあたかも生

きているかのような写真をはめ込んだ墓の周囲に、可憐な草花がいっぱい手向けられ、家族が日曜の礼拝毎に死者を追悼していることを今でも鮮烈に覚えています。

亡くなった人をおぼえ、亡くなった人を祭り、亡くなった人の菩提を弔うことは、時代をこえ、洋の東西をこえて、悲しみを昇華させ、自分の生き様を考える人間の英知ではないかと思えます。

私達人間はどこから来て、どこへ行くのでしょうか。

死ぬるということはなんのでしょうか。

死んだ後どうなるのでしょうか。

生きるということはどういうことでしょうか。

何をしなければならないのでしょうか。

人は生きている限り、このことを考え続け、自分自身に問い続けます。

最近、私は、この問題で大変感銘を受けた一冊の本がありますので、この機会にご紹介したいと思います。

テレビでも紹介されたアメリカの哲学者レオ・バスカーリア博士が子供達の為に書いた「葉っぱのフレディ——いのちの旅」という童話屋出版社から出版された絵本です。

春になって大きな木の梢に近い太い枝に生まれた葉っぱのフレディが、親友で兄貴分の葉っぱのダニエルとの話し合いの中から「いのち」について考える話です。

「夏は気持ちよく遊び、人間に涼しい木かげを作ってあげ、秋になるとみごとに紅葉するが、同じ葉っぱでもみなちがう色になるのは、生まれるときには同じ色でも、いる場所がちがえば、太陽に向く角度がちがう。風の通り具合がちがう。月の光、星明り、一日の気温、なにひとつ同じ経験はないんだ。だから紅葉するときはみんな色が変わってしまうのさ。冬は引っこしの時で、ひとり残らずいなくなるんだ。」フレディは不安になって「引っこしするとは、死ぬことでしょう。」とたずねると、ダニエルが答える。

「世界は変化しつづけているんだ。変化しないものはひとつもないんだよ。春が来て夏になり秋になる。葉っぱは緑から紅葉して散る。変化するって自然なことなんだ。きみは春が夏になるとき、こわかったかい？緑から紅葉するとき、こわくなかったろう？ぼくたちも変化しつづけるんだ。死ぬというのも変わる一つのつななんだよ。」

春に生まれて冬に死んでしまうフレディの一生はどんな意味があるというのでしょうか。「ダニエル。ぼくは生まれてきてよかったのだから。」とフレディはたずねました。

ダニエルは深くうなずいて「僕らは春から冬までの間、ほんとうによく働いたし、よく遊んだね。まわりには月や太陽や星がいた。雨や風もいた。人間に木かげを作ったり、秋には鮮やかに紅葉してみんなの目を楽しませたりもしたよね。それはどんなに楽しかったことだろう。それはどんなに幸せだったことだ

ろう。」ダニエルは満足そうなほほえみを浮かべ、ゆっくり、静かにいなくなりました。フレディはひとりぼっちになりました。そのフレディも初雪が降った翌日の明け方、迎えに来た風によって枝をはなれて地面にそっと降りていきました。そのときはじめてフレディは木の全体の姿を見て、なんてがっしりした、たくましい木だろう、これならいつまでも生きつづけるだろう。フレディはダニエルから聞いた「いのち」ということばを思い出しました。「いのち」というのは永遠に生きているのだ、ということでした。

命というものは永遠に生きて続いていくということは、最近のDNA、遺伝子の研究で分かって参りました。父と母の遺伝子はそのままま今生きている私達に、また私達の遺伝子はそのままま子供・孫達へと受け継がれ、永遠に続いて行きます。

私達人間は何時か必ず死ななければなりません。けれども命は、子供・孫へと生き続けております。

木の葉っぱ一枚にも、人の為に木かげを作ったりあげたり、紅葉して人の目を楽しませたりして静かに散っていくように、私達人間も生きている限り、何か人の為に生き、人を喜ばせ、時がくれば死ぬことが自然であることをこの小さな一冊の絵本は教えてくれております。

私達もまた何時か必ず死ぬということと、生きている間は少しでも周囲のお役に立てるような、生き甲斐を見つけて生きて行くことをしたいと思います。